

ご挨拶

本日のご来場、誠にありがとうございます。創立25年からまた新たな一歩を踏み出すことができましたこと、皆さまのあたたかいご支援のおかげと深く感謝申し上げます。

第一ステージは、今年もルネッサンスの教会音楽を取り上げました。

現在、震災から一年三ヶ月を経ても、いまだに苦しみつづける方々がおられます。避難所はすでに閉鎖されたものの、まだ3割もの被災者が仮設での生活だそうです。義援金の協力はしても、はたしてその人たちの心の痛みに寄り添うことができているでしょうか。

本日最初のステージでは、民の苦しみ、キリストの受難をテーマにした曲、そして慈母マリアを讃える曲を通して、いま「私」は被災された方々のつらさを共感することができのだろうか…という問いを自身に向けたいと思います。

第二ステージでは、今年もイギリスマドリガルの黄金時代の最もポピュラーで楽しめる作品を選びました。恋に悩む歌、春の到来を喜ぶ歌、恋人にアタックする歌、庶民の活力を歌う曲などをお楽しみ下さい。

第三ステージは、フランドルのこころを歌う作品として「君を恋う歌 Ik misse U」「ひつじ雲 Wolkenschaapjes」「人間だから歌おう Mens zijn」のつ三曲を、さらに、第一ステージの思いを近代フランドルの曲を通じてお届けしようと、ここでも Ave verm corpus と3人の作曲家の Ave Maria、そしてオランダ語でマリアさまを讃える Bi'twegkapelleken(遠くの小さな聖堂にて)と Wees gegroet Maria(Ave Maria のオランダ語訳)を選びました。被災地では今この時も大勢の方々がなかつらい思いに耐えておられます。今日はご来場の皆さまとともに思いをともにし、被災地に向けて心から声援を送りたいと思います。

室内合唱団アンサンブル・ヘーメルス 団員一同

Het Programma

1 ルネッサンスのモテット

Improperium <p>この責めに</p>	Orlandus Lassus (1532-94)
Crux Fidelis <p>信仰の十字架</p>	Clemens non Papa (ca. 1500-56)

O quam gloriosum est regnum

おお栄光の王国	Jacob Vaet (ca. 1529-67)
---------	--------------------------

Ave Maria~Virgo serena

めでたしマリア〜清らかなる乙女	Josquin des Prez (ca. 1450-1521)
-----------------	----------------------------------

Ave Maria 8声

めでたしマリア	Tomas Luis de Victoria (ca. 1581-1611)
---------	--

2 イギリスマドリガルの黄金時代

Now is the month of Maying <p>今や楽しき五月</p>	Thomas Morley (1557-1602)
April is in my mistress' face <p>四月はわが恋人</p>	Thomas Morley (1557-1602)

The messenger of spring

春告げ鳥	Francis Pilkington (1562-1638)
------	--------------------------------

O stay sweet love

恋人よここにとどまれ	John Farmer (ca. 1560-?)
------------	--------------------------

What saith my dainty darling?

どうなんだい？	Thomas Morley (1557-1602)
---------	---------------------------

Come, heavy sleep

いざ来よ深き眠り	John Dowland (1562-1626)
----------	--------------------------

Fine knacks for ladies

淑女向けの素敵なお小間物	John Dowland (1562-1626)
--------------	--------------------------

3 フランドルの人間模様

Ik misse u <p>君を恋う</p>	Guido Gezelle / Herman De Houwer
Wolkenschaapjes <p>ひつじ雲</p>	Willem Kersters / Willem Kersters
Mens zijn <p>人間だから</p>	Jan Veulemans / Herman De Houwer

Bi 't wegkapelleken

遠くの小さな聖堂にて	Guido Gezelle / Edgar Tinnel
------------	------------------------------

Ave Maria

めでたしマリア	Joseph Ryelandt
---------	-----------------

Ave Maria

めでたしマリア	August De Boeck
---------	-----------------

Ave Maria

めでたしマリア	Jules Van Nuffel
---------	------------------

Wees gegroet Maria

めでたしマリア	Renaat Mores
---------	--------------

Ave verum corpus

めでたし真の御身体	Lodewijk Mortelmans
-----------	---------------------

Background

この度の演奏会のテーマは昨年に続き『イギリスのマドリガル』ですが、もうひとつのテーマが『Ave Maria』です。宗教音楽のテーマとして大変人気のあるマリア様ですから、宗教画のモデルとしても大層人気があります。ルネサンス期のマリア像はふくよかで美しい理想の女性像のように描かれた作品が数多くありますが、今回の演奏会にご登場いただいたマリア様もやはり美しい。作者は有名なレオナルド・ダ・ヴィンチ様です。実はこの作品には同じ構図で 2 種類の作品が存在するのですが、その理由は…いえ、その前にルネサンスの時代について少しだけ。

ルネサンスとは、西欧の人々の「見たい、知りたい、表現したい」欲求が溢れ出した時代です。美しいものを神（教会）だけに独占させるのはつまらない「オレ達にも楽しませろ」そう考えた人々が各分野に登場したのです。しかし、絵師に絵を描かせ、音楽家に作曲させるにはカネが必要です。中世の時代にカネが集中したのは教会（ローマカトリック）でした。しかしやがて、アジア、アフリカから宝石や毛皮、香辛料などの産物の流通が増えるにつれて、裕福な交易商人が誕生します。地中海で縦横無尽に帆船を操る船乗り達を生んだ、イタリア半島のジェノバ、ヴェネチアなどの都市国家の人々です。裕福な商人は都市国家を繁栄に導き、関連産業にカネをまわすことになります。この結果、富を蓄えた人々が絵師や音楽家の新たなスポンサーとなったのです。

新たなスポンサーが、神のため（だけ）ではなく、人（自分）のためにも絵を描かせ、音楽を作らせた結果、神に一步近い職業だった絵師と音楽家に更に優秀な弟子が集まり、一人前になった弟子達は新たなスポンサーを求めて西ヨーロッパの宮廷を旅します。

その時代を代表する天才レオナルド・ダ・ヴィンチ不朽の祭壇画『岩窟の聖母』（チラシで使用した左の作品、パリのルーヴル美術館に所蔵）。本来ならばミラノのサン・フランチェスコ・グランデ聖堂の礼拝堂を飾る作品であったが、

当時、レオナルドとこの祭壇画の依頼主との間で作品の構成や報酬を巡りトラブルがあり、それを仲裁した（当時ミラノを治めていた）フランス王ルイ 12 世に、レオナルドが献上したとされる。本作では聖母マリアを中心に、左に幼児の姿をした洗礼者聖ヨハネ、右部分に祝福を与える幼子イエスと、大天使ウリエルを配されているが登場人物に神的人格の象徴である光輪が描かれていない点や、大天使ウリエルが人差し指で首を斬る仕草で（聖ヨハネの死を暗に）示している点、洗礼者聖ヨハネと幼子イエスの明確な区別が為され

ていない点（通常、洗礼者聖ヨハネにはアトリビュートである獣の衣や十字の杖などが描かれる）などから祭壇画としての役割が果たせないとして、祭壇画の依頼主から（未完成であるから、と）受け取りを拒否されたらしい。後方の屹立した巨石は『無原罪の御宿り』への皮肉ではないかという指摘もあり、レオナルドが祭壇画の依頼にこの絵を描いた意図が何だったのか、記録が無いのでわからないが、ギャラが安かったのか、依頼主が気に入らなかったのか、想像するだにほくそ笑んでしまう（が、依頼主との間で 20 年間に及ぶ訴訟があったらしい）。

そして、描き直されて改めてサン・フランチェスコ・グランデ聖堂へ納められたのが、当プログラム表紙に使用した右側の作品。構図はルーヴル版とほぼ同じであるが、やや硬質な表現手法などから、描いたのは共同制作者だったデ・ブレディス兄弟の作品だろうと言われている。依頼主の意向を汲み、幼児洗礼者聖ヨハネにアトリビュートである十字の杖と衣を加え、幼子イエスとの間に明確な区別が為されている他、大天使ウリエルを除く聖母マリア、幼子イエス、幼児洗礼者聖ヨハネには神的人格の象徴である光輪が描かれている点や、大天使ウリエルの軽やかな衣服の表現やポーズの変更など、ひと言で言えば毒気を抜かれた眠たい絵になってしまっている。(か)

清く高きところへ響きあう 天上のハーモニーを めざして

室内合唱団アンサンブル・ヘーメルスは、15～16世紀ルネッサンスの先駆者として活躍したフランドル楽派の作曲家たちの作品を研究・演奏するために1986年に結成されました。団名のHEMELとは、フランドルの言葉（ネーデルランド語）で「天・天蓋」を意味しており、天上の響きを追求したいとの願いを込めたネーミングです。

創立以来、宝塚国際室内合唱コンクールで銅賞6回、神戸ヴォーカルアンサンブルコンサートで銀賞を受賞しています。’92年のベルギー演奏旅行では好評を博し、ベルギー・リンブルグ州の Hasselt市の合唱団マンテリウスアンサンブルと姉妹提携するなど、ベルギーフランドルに精通した合唱団として活躍しています。

これまで、ルネッサンスの宗教曲・世俗曲にとどまらず、ネーデルランド語によるフランドル民謡やベルギー近代の作品も多数初演・紹介してまいりました。